

	<p>2009年11月15日 第75号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会 事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/ E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	---

光が丘公園にある自然保護区 バードサンクチュアリとすすき原っぱ

光が丘公園のすすき原っぱに行きました（写真下）

光が丘公園は、グラントハイツ（米軍の宿舎）跡地につくられた公園です。自然の森に見えますが、大部分が造成され植栽されたものですが、年月を経て広々とした緑地になっています。まだピオトープという言葉もなかった時代に、自然を意識して設計されており、整備が完了した1987年にはバードサンクチュアリや草原ゾーン（すすき原っぱ）ができていたそうです。

9月19日に、管理されている生態工房の佐藤さんに案内していただき、お話をうかがいました。生態工房は「自然保護区をよりよくする」ことを目的に活動しているNPO法人で、公園協会の委託によりバードサンクチュア리를管理運営し、すすき原っぱはボランティアの立場で管理しています。バードサンクチュアリの池では、やはり外来生物が問題になっていて（私達も小さな池



で苦労していますが、定期的に駆除しています。ザリガニの捕獲量は1回で100匹、1年間で約8000匹というものすごい量。継続的に取り組んできた結果、ミシシッピーアカミミガメは駆除に成功したようだとか。

バードサンクチュアリの観察舎では、備え付けの望遠鏡で野鳥を観察できる楽しいところです。佐藤さん達は、来園者に池に来た野鳥を教えてあげたり、パネルや実物展示をしたり、あるいは外来生物の問題を紹介したりして、ここは自然観察と自然教育の場所になっています（土日祝のみオープン）。

さて、バードサンクチュアリの向かいにあるすすき原っぱは、赤塚のバッタ広場と同じ草原ピオトープです。公園にも普通の草地はありますが、一律に頻繁に草刈りします（赤塚城址の場合は年4回）。草原のピオトープでは一律に全部刈ることはせず、また草刈りを抑制しています。

すすき原っぱは城址のバッタ広場より広く1050m²あり、周囲にロープが張ってあって「中に入らないでください」の看板があります。2005年から原っぱを拡大したので2000m²になりました。外側の拡大区域は中に入ってもよく、虫捕りなどで遊べるので、昆虫網を持った子ども達が見られました。こんなふうにバッタ広場も広くなるといいなあ。



佐藤さんの話を聞く

私達がいるところは、普通の公園の草地（刈り込まれた草地）。その奥の「昆虫広場」の看板がある区域が、あとから増えた「原っぱ」で、中に入ってバッタ等を捕まえて遊んでもよいところ。奥の草丈の高いところがもともとあったすすき原っぱで、ここには「中に入らないでください」の看板がある。

すすき原っぱは、池を掘り上げたときに出土を盛って整備され、ススキが多い原っぱ、木もある原っぱ（表紙の写真）。高いところは砂利敷で低いところは湿地状と変化をもたせてつくられた原っぱ、の3つの島に分かれていて、それぞれ植生にも特徴があります。

さて、すすき原っぱは、外から見ると高い草丈のススキとオギの藪です。その中に入れてもらうと、なんと中に迷路ができています！と思ったら、この迷路が佐藤さん流の草刈りの跡、8月に刈り払い機で刈った跡だそうです。草刈りは年2回で、夏は道をつける程度の草刈りですが、5月末には7～8割とかなり大々的に刈ります。刈り方は気まぐれ刈りで、同じ所を毎回刈ったり、いつも刈り残されてしまうところがあったりするそうです。写真のように人の背丈より高いすすき原っぱなので、中の迷路にいると外からは人がいることはほとんどわからないほど。

大群落になっているススキ、その穂でミミズクならぬトトロをつくろう、という草原の自然に親しむイベントもあるそうです。ススキの穂で遊んだり、虫捕りをして遊んだりできるのが原っ

ぱのいいところですね。



すすき原っぱの中
中にいると外からはほとんど見えな
いようなススキの
藪と、迷路のように
刈り込まれたあと。
ススキが目立つが、
ツル植物など植物
の種類も多い。

このようにすすき原っぱも自然を取り戻すために頻繁に草を刈りません。草刈り等管理の仕方の違いや、もともとの地形や環境によって、違った草原になるのがおもしろいと思いました。ここは米軍の宿舎跡地を造成して人工的につくられた草地で、周囲に森はありません。このまったく人工的につくられた草地に、鳥が運んだか、風で飛んできたか、キンミズヒキ、エビズル、ノアズキ、ダイコンソウなどが生え、昆虫ではシブイロカヤキリモドキ、ショウリョウバッタモドキがいるそうです。自然の力はすごいですね。

あまり見かけないピンク色のきれいな花が咲いていました。アレチヌスビトハギという名前の帰化植物。この種子はマジックテープのようにベタッ衣服にくっついてとれません。こんな帰化植物も増えているのですね。

公園のなかにジャングルのようなすすき原っぱがあることに心強さと親近感を感じた1日でした。

アレチヌスビトハギの種は、服にしっかりとくっつく



光が丘公園の中でプレーパークも（追記）

帰り道同じ公園の一角で子ども達がブロックでつくったコンロや七輪で小さなたき火をしていました。食べられるドングリのマテバシイを焼いたり、なぜかビー玉を焼いている子供も。少

し離れたところでは小さな子ども達が穴を掘って水を入れたりしてどろんこ遊びをしていました。そしてそばに「プレーパーク」の看板がありました。こんなふうには遊べる場所があるのはいいですね（坂本 郁子）



もっと草地があるといいなあと思うけれど・・・

赤塚城址のバッタ広場は出来て10年経ちます。ここは周囲の自然樹林地の影響が大きいところです。私達は最初の3年間は経過を観察するだけで手を入れませんでした。そうしたら周囲の樹林地の木の種がたくさん芽生え育ちました。3年後若木を全部切りましたが、すぐにもっとたくさんの木が生えてきました。この植物の力は驚きでした。半分放置状態の草地は徐々に姿を変えます。たくさんの生き物に出会える楽しい場所です。徐々に草地はエノキとクズのジャングルになりました。「このままではまずい」と2008年は徹底的にクズ・ササ等を刈り取る方針に変更、1年間で13回も手入れをしてクズは劇的に減りました。引き続き2009年もこの作業を続け、まだ手を抜ける目処はたっていません。草原ピオトープが、公園の草地より管理に手間がかかるなんて予想もしませんでした。猪鼻さんが言うように、スタート時点から草地として管理すべきだったのかもしれない。

すすき原っぱを見、佐藤さんのお話を聞いていろいろ刺激を受け、考えました。そのつもりで当たればバッタ広場の外側に拡大バッタ広場もつくれそうだな、とも思いました。

都会の子ども達が、珍しい生き物がいなくても虫を探したり遊んだりできる草原がもっとあればよいと思います。そのためには草地の管理は楽ちんでなければ、と思います。

話は変わりますが、気になるのが区立公園。なぜか草は生えていません。学校の校庭同様に固くしまった地面にわずかに生えている草もよく切れる刈り払い機が土煙をあげて地際を削りとっています。ササも生えていてはだめ。私がよく行く日暮台公園も西台公園もさくら公園でも、わずかに生えている草が削りとられ、平坦地でも表土がなくなって木の根は浮き出ています。

一方で環境のために校庭の芝生化が流行っています。なぜ芝生がよくて、公園の斜面の少し伸びたササ等がいけないのか、ちぐはぐな感じがするのです。草地は夏の暑さをやわらげ、土がやわらかくなり、雨水を浸透させ、木の根を守り、多くの生き物にとって裸の地面よりましな環境です。ハキダメギクなんてひどい名前の雑草も可憐な花を咲かせます。区の予算も限りがあることだし、園路以外はもう少し雑草を許容してもいいのでは、と思うのですが（坂本 郁子）

落ち葉を利用してみませんか

地球の温暖化により最近各地の紅葉が、以前より10日くらい遅れていると言われている。11月になると板橋区内でも木々の紅葉や黄葉が始まり、散策の目を楽しませてくれる。この現象は気温(緯度、高度)で変わるので、桜前線とは逆に北から南下し、高山から平地へと下りてくる。コハウチワカエデは最低気温が8℃になると始まり、3℃になると急激に進むことなど、NHKが詳しく報じていた。因みに今年の秋以降、都心で最初に8℃を割ったのは11月3日だった。紅葉の時期は樹種、樹齢(樹勢)、日当たり、生えている場所の乾き(水はけ)具合などで変わり、群植された同じ種類の中の



前谷津川緑道の紅葉

1本だけが早々と紅葉したり、逆に遅れて紅葉する木があるのを見かけるので、個体差もあるように思われる。高地や水辺などで霧や水蒸気による水分が紅葉を長持ちさせるそうなので、乾いたコンクリートジャングルの都会では紅葉が長持ちしないようだ。

きれいな紅葉も次には落葉し、街では交通(スリッパ)や衛生・景観から邪魔者扱いをされてしまい、木陰による日照障害と相俟って街路樹などが大胆に剪定され、樹木の景観を損ねている例が散見される。エコロジーによる持続可能な自然の維持が叫ばれている現在、文句を言いながら落葉を集めゴミとして焼却してしまうのは、何とも残念な話である。落葉はそれを落した木の周りに置いて腐らせ、土に返して木の肥やしにするサイクルに取り込むのが最良だが、集めた落ち葉を腐葉土にして、園芸の草花の用土に使う事が一般家庭でも出来るエコだ。私も以前は落葉だけで、昨年からはコンポストで生ごみと合わせて腐らせ園芸に使用しているので、参考までに腐葉土作りを紹介したい。

方法はいたって簡単、集めた落葉が乾いていけば水を打って湿らせ(米のとぎ汁ならなおよい)、レジックロなどの袋に詰めて、落ち葉がこぼれないように袋の口を軽く封じて保管するだけである。保管は家庭の事情により変わるが、ト口箱などに入れ(周りを汚さぬため)たり空き地に直置きでも良い。直置きでは袋の結び目を下にするのがポイントで、余分な雨水が入らず地表からの水分が適宜補給されて好都合である。葉が乾いていてガサガサしている場合には、早く腐らせるために袋に重石を載せて圧縮しておくといよい。時々袋を持ち挙げて揺すって葉をほぐし、かき混ぜると満遍なく腐らせることができる。

以上、夏の間に酸素を供給し木陰を提供し、花や実など景観で和ませてくれた木々からの折角の贈り物の落葉、ありがたく頂戴して有効に活用したいと考えている。(猪鼻昭二)

武蔵野とススキ

「赤塚城趾の森1万年の歴史」の続きが仕事やらなにやらでなかなか書けない。途中をとばしてとりあえず結論の一部を先に書いておきたい。

JR 青梅駅付近を扇頂として入間川と多摩川にはさまれ、扇の様にひろがり荒川崖線まで続く武蔵野台地は、大雑把に言えば多摩川がほぼ十万年かけて作った扇状地である。最近の氷河期が終わった約1万5千年前以降、人間の手により自然が改変される直前まで、どのような植生が武蔵野台地を覆っていたのであろうか。人間により改変される直前(この時期についても諸説ある)は常緑の広葉樹林であったという説、これは現世の植生を研究している人に多いようで、吉良龍夫の温量指数を根拠の一つにしているようだ。もう一つは落緑広葉樹林であったという説、これは過去の植生を研究している人に多い。花粉分析や、遺跡から発掘される木材を根拠としているが、武蔵野台地周辺の湿地から出たもの以外はほとんどなく、なかなか決定打にはならないようだ。台地中央部の乾燥した土壤に存在する花粉を分析するのは、困難かつ多額な費用がかかるようで残念ながらほとんど行われていない。

武蔵野台地は一面のススキ原であった?

万葉の昔から江戸時代が始まる頃まで、武蔵野台地は一面のススキ原であった書いてある本がしばしば見受けられる。これは一体何を根拠にしているのだろうか。どうも古い時代の和歌や紀行文に武蔵野とススキが登場することを根拠にしているだけのようだ。これらに一体どれほどの資料価値があるのであろうか。13世紀後半に編纂された続古今和歌集にある「武蔵野は月の入るべき嶺もなし尾花が末にかかる白雲」をとりあげてみよう。「武蔵野とススキ」というイメージを都の人にはっきりと結びつけたのは多分この歌であろう。その後似たような歌が輩出し、工芸品などに使われる「武蔵野文様」が成立する。しかしこの源通方の歌は実際の武蔵野を見ることなく創られたことは明白である。武蔵野は月の入るべき山に取り囲まれているのである。

1300年頃に書かれた「問はず語り」に武蔵野の「はぎ、をみなえし、をぎ、すすき」の原を通り過ぎた思い出が載っている。この武蔵野が武蔵野台地であったかどうかは私はまだ調べていない。「をぎ、すすき」という非常に良く似た種だが、通常は同じ場所には生えない植物が並んで登場している事に注目しておこう。11世紀後半に書かれた「更級日記」には、武蔵の国の竹柴寺(現港区済海寺であろうとされている)へ向かう途中「むらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて」を進んだという一節がある。当時の都人士にススキとオギの同定ができたのであろうか。ただし「更級日記」では「蘆荻」となっているので、多分オギで間違いないようだ。場所も武蔵野台地ではなく当時の利根川流域であろう。

万葉集には「すすき」を詠んだ歌が40首ぐらいあるらしい。ススキも入っている「秋の七草」もその頃には成立している。当時の大宮人にはススキとそれにまつわる情緒は共有されていたのであろう。遠い異国、武蔵の国にはススキが一面に生えた広大な野があるらしい。都人の情緒を掻き立て、「武蔵野とススキ」という伝説がかくして出来上がった。

武蔵野台地はどうして草原になったのか?

武蔵野がススキの原であったという説をとなえる人は、以前は森林地帯であった武蔵野は人間が火入れや放牧を繰り返すことにより、森林が減り草原になったという。現在の雑木林は1655年の野火止用水開削後の開発や、その後の三富新田の開発の頃、植林によって生まれたという。

広大な森林が火入れや放牧によって跡形もなく消え失せてしまうのであろうか。716年に朝鮮

半島からの帰化人を高麗郡に集団移住させている。高麗人は火田法に長け、森林に火をつけ武蔵野を開発したという。しかし移住地は現在の入間、日高である。入間川、高麗川の川辺が中心で武蔵野台地の中央に彼等が住んだ筈はない。理由は水である。松平信綱の開発計画には野火止用水の完成が不可欠のものであった。夏期の降水量は作物を育てるにはなんとか間に合う。武蔵野台地平坦部が当時、ほとんど無住だったのは人間の飲み水がなかったからである。用水開削が困難であった三富地区では深い井戸(まいまいず)を掘るほかなかった。

中世の武蔵野台地は武蔵の武士団の一つ、村山党の勢力が強かったようだ。しかし中世の居館跡が発見されるのは狭山丘陵や台地末端部など水が得られやすい場所にほぼ限られている。湯水期には水が涸れてしまう川(不老川)ばかりの、台地中央部に人が住めるようになったのは井戸用水の技術が発展した近世以降のようだ。

延喜式には武蔵野周辺の牧がいくつか記載されている。当時の地名と現在の場所はまた完全には解明されていないようだが、今のところ武蔵野台地には牧は一つもない。理由は飲み水がないからである。牛馬の放牧地には水飲み場が欠かせない。また放牧地にはススキ草原は成り立たない。成長点が高く、踏みつけに弱いススキは放牧地では簡単に滅び、シバ草原に移行する。乗鞍周辺や菅平周辺の放牧地を筆者は1960年代から80年代に数回見ているが、いずれも典型的なシバ草原であった。ススキ草原が成り立つのは採草地としてである。厩舎飼いを主にする場合のみススキ草原が出来上がるはずだが、そうもいかない。

ススキが牛馬の良好な飼料であると書いてある本もしばしば見受けられる。しかし、筆者が直接話を聞いた(ほんの数人だけだが)ことがある、牛馬を飼った経験を持つ農家の方や、畜産関係者にはススキが良い飼料だという認識はなかった。一人だけだがススキは牛馬に害があるといった方もおられた。飼料としてススキの致命的な欠点は、地上部に栄養が多く飼料には最適季節にススキを2、3年連続して刈ると勢いが衰え、次年の収量が大幅に減ってしまうことである。

草原が広がったのは江戸時代

水本邦彦(2003)によると江戸時代は草山の時代だったらしい。江戸時代に草山が多かったのは当時の絵画からも窺え、昆虫相からも推察できる。昆虫については次の機会に書く予定である。

氏によれば草山化の主な原因は田畑の肥料を採取するためだったという。江戸時代は反当りりの米の収量もかなり増え、他の農産物生産技術も大きく改良された時代であった。田畑に肥料を与えることが一般化した時代であったという。

武蔵野台地だけが江戸時代になって森林が増えたとは考えづらい。平安時代から室町初期まで停滞気味であった日本の人口は応仁の乱ごろから徐々に増えだし、江戸時代初めの100年間に急増する。耕作地面積もそれに伴って増えている。江戸周辺は当時成長の中心地であり、人口も耕地も当然急増したであろう。

水本によれば大都市周辺では下肥や金肥も利用されるが、大部分の地域では草木肥が中心であったという。草木肥を得るために必要な山野面積は燃料用の4倍であったという。

江戸の町中ではようやく燃料として木炭が普及しはじめるが、農村では薪が中心でこの傾向は昭和まで続く。日本の木炭生産量のピークは確か昭和15年と30年である。経験がある人なら草や柴だけで炊事をやろうとは絶対思わない。燃料としてはある程度の太さを持ち、“おぎ”になる木が欠かせない。武蔵野台地周辺の人々はこの燃料を武蔵野台地の雑木林に求めた。縄文時代以降、燃料は人間の生活に欠かすことが出来ないものである。野火止、三富の開発に雑木林の育成が入っているのは、当時雑木林の利用方法がすでに確立しており、暮らしに絶対必要なものであ

るという認識があったからである。またドングリは乾燥に弱く、遠い所から持ってくるのは困難、薪も重くなるべく近い所で調達したい。武蔵野台地の雑木林は少なくとも1万年以降、現在まで連綿として続く自然林(人為による樹種の個体数偏向は当然ある)であるという私の説の根拠をまとめなく述べた。ススキの話には欠かせない黒ボク土壌については次回。(釣巻岳人)

活動のお知らせ

運営委員会は原則として第4土曜日の作業・観察会の後に赤塚ため池公園そばのラーメン「しらかば」で行い、報告や活動内容などを相談します。どなたでもお気軽にご参加ください。

午前中の作業の状況で時間が多少ずれることがあります。雨天で作業が中止の場合も運営委員会は開きます。わからないときは、坂本(090-4618-1295)に御連絡下さい。

12月運営委員会： 12月19日(土) 12:30~13:30

1月運営委員会 1月16日(土) 12:30~13:30

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：11月28日(土) 12:30~

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは事務局瀬田(3969-7124)まで

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったピオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ピオトープの環境整備を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

バッタ広場ササ刈等作業と生き物観察

11月28日(土) 10:00~12:00

12月19日(土) 10:00~12:00

1月16日(土) 10:00~12:00

集合場所：赤塚トンボ池(板橋美術館そば)

成増4丁目緑地調査(植生調査)

12月5日(土) 10:00~12:00 東上線成増駅集合

1月9日(土) 10:00~12:00 東上線成増駅集合

毎月1回の定点観察です。(連絡先)坂本090-4618-1295

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な使途は、会報郵送料、印刷費、ピオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。